



むらさき抄

下

富原常雄



むらさき抄（下）

昭和三十六年十二月二十五日 発行

定価 三百三十拾円

著者 富田常雄

発行者 矢貴東司

印刷所 北山印刷株式会社

発行所 株式会社 桃源社

東京都中央区日本橋筋般町一丁目十二番地
電話（六七）四〇〇一、二番
支店 東京六四三五一

目 次

しがらみ草紙	岐路	その前夜	地上巡礼	若き怒り	苦闘	女の敵	散りぬるを	残飯屋	風花	春愁	炎の遊び	他殺説	ゆく雁	辭靈
一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一三	一四	一四	一四	一四	一四

師走の風	三二
青春の譜	三七
踏　　青	四〇
夢　　一　　夜	五〇
愛ふたたび	五三
風雪の窓	五三
素　　　　顔	九二
運と鈍と根と	〇三
残されたもの	三七
東京暮色	三〇

むらさき抄

下卷

しがらみ草紙

「まあ、お嬢さま、島田がよくお似合いですこと」

永沢安恵はたばこ屋の二階へ尋ねて来た実千代に座布団をすすめながら、愛想よく言った。

「永沢さん、お嬢さんなぞと呼ばないで、実千代と呼んで下さいな。だって、永沢さんは善哉叔父さまの奥さんでしょう」

「いいえ、未だ」

と、安恵は顔を赤くした。

「叔父さまの奥さんが、あたしの事をお嬢さまなんて可笑しいわ、あたしも、叔母さまと呼ぶから、実千代と呼んでね」

「はい、はい、判りました。では実千代さん、学校をご卒業なさってお目出度うございます」

「でも、叔母さま、あたし、もっと学校に居たかったわ」

「どうしてですの。すぐ、ご結婚じゃありませんか」

「それが、いやだから」

と、実千代は春の陽射しの明るい窓の方へ眼をやった。

「まあ、お嫁入りがいやだななんて。でも、誰でも娘時代に別れるのが淋しくて、一度はそういう気持ちになりますのね」

「あたしは、ほんとに、いやなのよ」

「どうしてですの」

実千代は返事に詰まった。女同士ではあっても、どうしても、達夫と許し合った恋をしていると口に出なかった。

「ねえ、叔父さまは」

と、実千代は話を変えた。

「毎日、出かけて行きますの。就職の口はあるらしいんですけれど、しばらく浪人するんだと言って。それに、先生をあんなん事にした犯人は死んで挙げられたけれど、

あの西田というのが、なんのために先生を殺さなければならなかったか、それを追求すると言つて。大方、その方をやっているのかも知れませんか」

「探偵みたいね。でも、もう、お父さまが生きて帰って下さりはしないわ」

「ほんとに」

安恵はしみじみ言つた。

実千代は善哉になれば、ほんとの事が言えて、この結婚を断わってくれるかも知れないと思つた。

母の雅代に言つたところで、勿論、ここまで来ては許してくれないに違ひなかつたし、真実も打ち明けにくかつた。

「もう、やがて、夕方でしょうから帰ると思ひますけれど」

「叔父さまに会いたいの」

「お待ちになつたら。あたし、なにか、お夕飯をこしらえますから」

安恵は楽しそうに言つた。

「お夕食なんていいわ、叔父さまが帰つたら、どこかへ連れて行つて貰うわ、銀座の『風月』の洋食でも。ねえ、叔母さま、それより、お話がしたいの」

と、実千代は甘えるように

「お互いに、なにもかも許し合つた男と女は結婚すべきが当然でしょう」

「そうですわね。でも結婚は恋愛の墓場だという人も居りますことよ」

「では、結婚とは別にするのね。だけど、そういう恋愛をした後で、お嫁に行くというのはいけないわね」

「時と事情に依つては」

「でも、相手は怒るでしょう」

「それは、夫となる人の理解にも依るだろうと思ひますわ」

「そう」

実千代はじつと考え込んだ。

自分の場合はどうなるのであらう。どうしても、柴崎晃との結婚が避けられないというならば強引に駆け落ちするか、達夫と別れるかの二つに一つしかなかつた。もとより、実千代は駆け落ちの如何なるものであるかは知らなかつた。ただ、母を嘆かせ、周囲を狼狽させ、怒らせるという結果だけは考えられた。それを避けようとするならば、達夫と別れる他はなかつた。しかし、会うごとに深まつて行く二人の愛情を捨てることは容易ではない。生ける人形として晃に嫁いだとして、その結果が幸福になれないことも判つていた。

だから、実千代は迷いに迷ひ抜いていた。

「ねえ、叔母さま、恋というものは周囲のあらゆる妨害をのけて、自分達だけで生きるのが正しいかしら」

「そうですね。それがお芝居にも新聞にも時々出る、心中というものになりますのね。自分達だけで生きようとして生きられないから、せっぱ詰まって死ぬのではありません」

「心中は幸福なのね」

「さあ、せっぱ詰まるといふのは幸福とは言えないでしょう」

「困るわ」

と、実千代は大きく溜め息をついた。

「実千代さん、大変、悩んでいらっしゃいますのね」

「判る、叔母さま」

「今度の結婚の柴崎さんとは別にあなた、恋をなさっているのでしょうか」

「そうなの」

「迷っていらっしゃいますのね」

「ええ」

「あたしには判りませんが、女は自分に忠実であることが大切ですよ。結婚と恋ということは人生の大きな課題ですわね」

「だから、叔父さまを待ってるの」

そう言つて、実千代はうな垂れた。

安恵は実千代の、そうした悲しげな姿を見ると不憫だった。

子持ちの自分は兎も角も幸福になった。たとえ間借りであらうとも、恋していた善哉と夫婦になれたのである。内縁でも、妻は妻である。子どものある事も理解してくれての上での愛情だった。

「実千代さん、女の幸福というのは愛されることですわ。金銀財宝を山と積んでくれる相手よりも、貧しくとも、愛わりなく愛してくれる人を夫にするのが女の幸福ではないか知ら。人によってはお金があつて、贅沢の仕放題ができる相手なら、たとえ、愛情を感じなくてもいいと言う人はありますわ。でも、それは嘘ね、ほんとの幸福じゃないのね。貧乏でも真実に愛情を持つてくれる人に、女は愛される幸福があると思ひますのよ。これは、世の中がどんなに変わつても、この地上に男と女が生きている間は変わりのない事だと思ふのよ」

涙が実千代の膝に落ちた。

「あたし、もう遅かつたのよ。それも、これも、あたしが弱くて周囲の力に負けたからよ」

涙のなかで言い、実千代は袂からハンケチを出した。

「結納もすんだし、式の日もきまっていたいまになって、あたし、急に自分のほんとの幸福がどこにあるかを考え始めたの。愚かね」

「実千代さんの愛している方は」

と、安恵はその顔をのぞくようにして訊いた。

「貧乏な画家よ、日本画だけれど」

と、実千代は告白した。

「愛し合っているの、いまも」

「ええ」

「どうして柴崎さんとの結婚のお話をことわらなかったの」

「あの人は学生だったし、貧乏な書生で、自分でも力がないって言ったのよ」

「卑怯な方ね」

「いいえ、違うの、あの人はおとなしいのよ、自分の力では未だ、あたしを幸福に出来ないからって。それに、あたし、あの人を誤解して、一度は離れたのだけれど、この頃になって、その誤解が解けたのよ。そして、急に」

「そこまで言って、実千代は赤くなった。

「前よりも、もっと、もっと深く愛し合うようになってしまったのよ」

「そう」

安恵が頷いた時、階段に音がして、善哉が勢いよく入って来た。

「もっと、もっと、深く愛するようになったって。実千代、はははは、ご馳走さま」

そう言って、彼は洋服姿でどっかりと胡坐をかけた。

「あら、叔父さま、聞いていらつしやったの」

実千代は赤くなって、もじもじした。

「梯子段を登りながらね」

善哉が笑った時、安恵が

「お帰りなさい。あなた、実千代さんはなにか、あなたに相談があるそうですよ」

「ほう、そうか。聞こうじゃないか」

「お夕飯をと思ったんですけれど、『風月』かどこかへ連れて行って上げて下さいな。ねえ、実千代さん、そうでしたわね」

「どうでもいいのよ」

「洋食か。俺はすしの方がいい。新橋の『大寿司』あたりに行こう」

「行ってらっしゃい」

と、安恵は自分は留守をする心算になっていた。

「なんだ、お前、行かないのか」

「でも、実千代さんがお話しにくいといけないから」

「馬鹿、これが、叔父の俺に言えることが、どうして、お前に言えないんだ」

と、善哉は実千代に顎をしゃくった。

「叔母さまも行きましようよ。お話しにくかったら止してしまいわ、おすしだけ御馳走になつて」

実千代はようやく明るさを取り戻して言った。

「支度しろ、安恵」

「はい」

善哉に促されて安恵が支度し始めると、彼は姪をじっと見た。

「今度の結婚のことか」

「ええ」

「恋人があるんだらう。それで、又、ぐらつき始めたんだらうが、もう、手遅れだぞ。式は四月二十八日じゃないか」

「知ってますわ」

実千代は悲しそうに言った。

「その島田はよく似合うなあ。いい花嫁さんになるだらう」

と、揶揄するように言つて

「君がぐらつくと、一番、困るのはお母さんだぜ。今になつて、いやだなぞと言ひ出せば、周囲の人間がひどい

迷惑をするぞ」

「それも判つてゐるの」

実千代はうな垂れた。

「万障繰り合わせて恋の方は諦めろ、実千代」

実千代は一旦、眼をあげて恨めしそうに叔父を見たが、又、うつ向き、唇をきゅっと噛みしめた。

「いや、と言うのだったら、もっと、早く断ればよかったんだ。安恵、まだか仕度は。永いぞ」

と、彼は安恵の方を振りかへった。

「あら、女ですもの、そんなに早くは出来ませんわ」

いそいそと答えた安恵は善哉と一緒に外出できるのが嬉しかった。

三人は電車の中でも、世間話以外にはしなかった。

新橋の「大寿司」に行つて幸いに空いて居たつけ台の前に腰を下ろしたが、酒を誂えた善哉は若い職人達と冗談ばかりを言つていた。

実千代はこういう鮎の食べ方を知らないし、手でつまんで食べることはきたならしいので、箸で挟んで食べた。

「おい、清、これは俺の女房で、こっちは姪だよ」

と、善哉は酔つてくると、自分から紹介した。眼尻の

下がって、口の大きい、人の好きそうな職人は小腰をかめて

「どうぞ、よろしく。お後はなにに致しましょう、奥さん」

と、安恵にだけ声をかけた。若いので、美しい実千代が眩しかったのだろう。

「この姫はな、跡見女学校出の才媛だ。どうだ、いいだろう」

「へい」

「しかし、時すでにおそく、お嫁入りを旬日に控えている」

「お目出度うございます。どうぞこの次は旦那さんとお出で下さいまし」

江戸前の職人らしく、清と呼ばれる若者は如才なく言った。

「実千代さん、おいしいこと」

安恵は横顔を向けている実千代に訊いた。

「どうだい。ここのキツケは大きいだろう。『大寿司』

だからってなにもシャリがでかいんじゃないんだ。キツケだよ」

善哉は得意だった。

「先生、めずらしく褒めて下さいましたね、いつもは、

くそ味噌なんだから」

「ほほほは、そんなに口が悪いんですの」

安恵は善哉がどんなに悪口を言うのかききたい程だった。

「さて、御興をあげようか」

そう言い、善哉は勘定を払ってすし屋を出た。

「日比谷公園の方へでも歩きながら話をきこう、実千代」

「ええ」

実千代は気が沈んで居た。街はすっかり暮れて、晩春のさわやかな風が頬を撫ぜた。

「叔父さま、あたし、結婚したくないんですの」

「さあ、困った。おい、おい、今更、そんな横紙破りは困るぞ」

「でも、せめて、叔父さまにだけは、自分のほんとの事が言いたい」

「それはいい、併し、駄々をこねるのは困るよ」

「一度はほんとの気持ちと言いたいのよ」

そう言い、実千代は涙ぐんだ。

「叔母さまには少し、お話ししたけれど、叔父さま、あたし、前に、ほら、あたしが信じていた大学生があつて、その人が女連れで待合に入った処を見たお話をしたこと

がありますわね」

「絵を描くとか言ったな」

実千代は大きく頷いた。

「そうですね。あの人、名前、言いますわ、池田達夫と
いって、永田町に南岳舎という塾を開いている池田静軒
先生の長男なのよ。二十五ですわ、学費が続かないので
大学をやめて、今は内職の仕事をしてながら絵を描いてい
ます。今年の文展の制作をするんですって」

「うむ」

「あの人が待合へ行ったのは事実ですけど、あの人、
潔白でしたのよ。あたしの誤解だったのよ。それで」

実千代は言い濁^まんで

「あたし達、元のように愛し合うようになってしまっ
て」

「おい、おい、惚^ほけかい」

と、善哉は揶揄した。

「いや、そんな事言うなら、あたし、もう」

「ご免、静聴します」

「そしてね、前よりもずっと深く愛するようになった
し、信じ合ひもしていますの」

「うむ」

「離れられないの。叔父さま、それでも、実千代は、こ

うなった以上、柴崎さんにお嫁に行かなければならぬ
か知ら」

三人は内幸町の門から日比谷公園の中に入った。

「そうか。つまり、焼け棒杭に火がついたので、柴崎の
方がいやになったと言うんだな」

「初めからいやだったのよ。だけど、周囲の人があたし
を、どんどん、お嫁に仕立てて行くんですもの」

「面白い言い方だが、君が初めにきっぱり断わらなかつ
たから、こういう結果が出たんだらう」

「それは悪いと思ってますわ」

「やっぱり、恋人の方は潔く諦めるんだな」

「叔父さま、それが女の幸福でしょうか」

実千代は鋭く訊いた。

「併しね、実千代、社会通念から言ってだな、結納を交
わし、結婚式も二十八日ときまっているものをひっくり
返そうというのは、ちょっと非常識だらう」

「知ってますわ、だけど」

実千代は公園の瓦斯燈を眼にうつしながら

「叔父さま、あたし達、許し合ったんですの」

「ふむ」

思わず、唸り、善哉は暗い中で安恵と顔を見合わせ
た。

娘が、すでに、娘でなくなったという事は、結婚を前にして重大な問題であるのは誰しも判るが、叔父としての善哉にとっては由々しいことだった。

「実千代」

彼はひくく呼んだ。

うつ向いたまま

「はい」

と、答え、実千代は体を固くして歩きつづけた。

「それが、どんな事になるか。お前には判るだろうな」

「ええ」

「結婚の約束をした相手を傷つける結果にもなるんだよ。向こうでは、お前を生娘として迎えるんだからな」

「知っています」

「知っていて、なぜ、理性を働かせなかったんだ」

「叔父さま、それは、自分でも判りませんの。口惜しかったのかも知れないの」

「なにが」

「愛してもいない人と結婚するのならという、反抗心もあって」

「だって、お前はともかくも納得したんじゃないか」

「さからい切れなかったから」

「じゃあ、初めから裏切るつもりだったのか」

「そんな気持ちはありませんわ。ただ、二人きりで会っているうちに、あたし、負けてしまったんです。あの人の気持ちや情熱に」

善哉は溜め息をついた。

「後悔はしていないのか」

「ええ」

「それでいいと思ってるのか」

「いいとは思っていませんわ、お母さんにも、柴崎さんにもすまないとは思ってますわ」

「それで、どうする気だった」

「結婚をお断りする気で、叔父さまに」

「実千代、それは虫がよすぎるぞ。いかに、恋人との情熱に負けたとはいえ、目の前に迫った式があるのに、みすみす、処女を捨てて、今度は結婚を断わるというのは」

思わず、善哉は怒鳴った。

「あなた、そんなにきつく仰しやらないで」

はらはらして安恵が口を出した。

「あんまり、理性がなさすぎるんだ」

「あたし」

実千代は嗚咽した。

「自分の幸福が一度だけ欲しかったの。兎さんという人

が、とても達夫さんと比較になる人ではないこと、あたしの前途は生きている人形以外でなくなることを知っていたから、だから、だから、たった一日だけの幸福が欲しかったの。ご免なさい、叔父さま」

善哉は実千代を鞭打つ気にはならなかった。女の心の秘密は人に告げ難いものである。

人妻ですら、その夫への不信から、ひそかな恋人を胸に描き、それが行動に移される事すらある。いわんや、実千代はようやくに恋を知りそめた娘である。

相手の男性の境遇はどうでもあれ、心に染まぬ結婚を前にしているとは言え、己れの恋人を愛し、信じ、慕っていたら、これは、実千代ならずとも、越えるものは越えたであらう。

理性の抑制を強いるのは無理である。情熱が人生に占める役割は大きく、更に女にとっては恋こそが命であった。

善哉は姪の女ごころを一瞬にして悟ったが、彼の立場として、この結婚を捨てよとは言えなかった。さればと言つて、自分が割り込んで柴崎家との婚約を潰してしまつたら、姉の雅代の立場はこれも又、全く無いものになるばかりか、非難と、強迫と、そして、精神的にも物質的にも損害を要求されることは当然である。

「実千代、お前の気持ちは判らないことはない。併しね、たとえ、そうなつても、そういう二人の関係を断つて結婚の方を履行すべきではないかい」

と、彼は静かに論じた。併し、それは彼の本意ではなかった。

「では、こうなつた実千代でも構わないと仰しゃるの。それが通りますの、叔父さま、お嫁に行つても」

実千代は泣きじゃくりながら息を詰めた。

「通らんだらう。今日までの社会通念として、初婚の娘は処女と相場がきまつているからな」

「それを、どうして、叔父さまは」

「胡魔化するよ。はははは、成功しないとは限らない」

善哉は虚無的に笑つた。

「あたしには出来ないの、そういう、女として、罪のあることは。いいわ、死ねばいいわ、お母さまには悪いけれど」

「死ぬって」

善哉は吐き出すように言つてから

「馬鹿野郎。心中でもする気かい」

と、叱つた。

「だって、生きる道がないわ。死ねば、みんなが許してくれるわ。実千代というものが灰になつてしまふんだか

ら」

実千代は声を上ずらせた。

「馬鹿、人間、死ぬくらいなら、なんでも出来るぞ」

「でも」

「逃げりゃいいんだ」

はっと実千代は息をのんだ。

「駆け落ちなんぞしろと言っているんじゃないぞ、いいか」

善哉はさあらぬ体で言つてのけた。

「あなた」

安恵は思わず、善哉の袖を引っぱった。

彼が実千代に駆け落ちをすすめている事が判ったからだった。もしそうなら、主なき井手家はとうなるであらう。しかし、若い二人が恋を遂げようとするならば、それ以外に道はないかも知れない。結婚の中止を柴崎家に申し出たら相手を怒らすだけのものであり、正直に、実千代には恋人があつてすでに、彼女が処女で無いことを言つたところで、それは可哀そうに実千代を傷つけるだけのものになる。平和な道はあるはずがなかった。あるとすれば、実千代の犠牲のみである。それは、叔父として恐び難いことだったのであらう。

安恵にも、それが判った。

「実千代、その池田という画家は一本立ちできるのか」

雲形の池の脇に出た時、アーク燈に照らされた姪の顔を見て、善哉はさり気なく聞いた。

「未だ、内職して絵絹や絵具を買っているのよ」

「ふむ、それじゃ飯が食えないな。もつとも、一人の口も二人の口も費用は同じだと言うからな」

これも生活への暗示だった。

「手鍋下げても言うが、小さな部屋を間借りして、屋根の上で自炊しているのを見かけるが、人間あれでも愛の巢は営めるものと見えるな。見ちゃ居られないが」

と、善哉は吐き出すように言つた。

「人間てえ奴はどこかで踏んぎりをつけないと、死ぬまで後手にまわるものさ。幸福って奴は自分で掴まなくちゃ駄目だな」

どうやら、善哉の言葉は実千代に対する励ましのようだった。

「どうだ、おい、その池田画伯に一ぺん会わせないか。俺が諭してやる。不心得をな」

「叔父さま、堪忍して」

と、実千代は悲しそうに言つた。

「なあに、話せば判る。それに、男同士だ。ぴんとくる